

〈娘〉の負い目の物語

——〈原爆文学〉からアダルトチルドレン小説へ——

篠崎 美生子

はじめに

原爆をめぐる語りには、しばしば、生き残った被爆者の死者に対する負い目の感情が刻印されている。〈原爆文学〉にも高い頻度で現れるその感情は、いわゆるサバイバーズ・ギルトとして一般化することがためらわれるほどに強烈である。それは恐らく、責任を取るべき者がそれを引き受けずに来たために、被害のより軽い者がより重篤な被害者に対する責任を肩代わりりしまったことによるのである。〈原爆文学〉の読者の一人として、私はそこに強い不条理感ともどかしさを覚えずにはいられない。原爆は、生き残った被爆者のその後の人生に暗い影を落とし、生き残ったことが幸運とは言い切れないような事態を招くことさえあつた。被害の軽重は決して単純にはかれるものではない。にも関わらず、ここに執拗にまつわる負い目の感情とは一体何なのだろうか。

被害者どうしで責任を負うことから来る強烈な負い目の感情の発生には、恐らく、丸山真男のいわゆる「超国家主義の体系」⁽¹⁾

が関わっていよう。「超国家主義の体系」とは、丸山が二ーチェの「へだたりのパトス」の参照によって看破した戦前戦中の日本市民の思考体系である。そこでは「天皇への距離」が唯一のモラルとされる上、「国家活動はその内容的正当性の基準を自らのうちに（国体として）持つており」、「それ自体「真善美の極致」たる日本帝国は、本質的に悪を為し能わざるが故に、いかなる暴虐なる振舞も、いかなる背信的行動も許容される」のだという。

私は、この体系が戦後も生き延びた結果、少なくとも形の上では開戦・戦闘継続の意志決定の主体であつたヒロヒト及び、戦後に彼を抱き込んだアメリカの責任まで免罪されたと考えている。原爆を「神の摂理」「恩寵」とする永井隆の言説が戦後の日本で歓迎されたのは、このメカニズム発動の好例なのだ。⁽²⁾

またこのモラルは、いわゆる「内面の発見」⁽³⁾とも結びつき、「天皇を中心」とした「同心円」⁽⁴⁾において自分より内側に存在する人の「内面」をのみ読みとつてその人に同情し、許す思考習慣を人々にもたらしたと考えられる⁽⁵⁾。その仮説に従うとき、例えば、リフトンが驚きを以て書き留めた事象——「被爆者の多くにとつて、とくに高年層被爆者にとつては、原爆投下後九日目に行なわれた天皇の特別放送のほうが、よりいつそう決定的」な「喪失感」をもたらしたということのわけを、初めて理解することができるよう思うのである。

……「天皇を」ただお気の毒だ……つていうことを、まあ今でもそれを思う、そのとき……どのように思われたか……その心持ちをお察しするんですね。……あの原爆落ちましたと

きと、あの陛下の「声を聞いた」ときと「くらべますと」……私
らにや原爆じやいうことわかりませんもんでね、それよ
りか……陛下のなんでしょ、お言葉のほうがつろうございま
したね⁽⁶⁾。

(第三章) 見えざる破壊)

このようにして、責任を取るべき者がむしろ思いやりの対象として囲い込まれた場合、生き残った被爆者はその代わりとして強い負い目を引き受けるしかなかつたのではないか。遺体処理のために「茂里町の製鋼所へ通」う男の「自分の生きているという責めのような気持ち」⁽⁷⁾、亡くなつた同級生の「母親の嗚咽」に「身を刺」され、「生き残つたのが申し訳ない」⁽⁸⁾と思う女学生の思い——本来いたわられるべき者が抱く不条理な負い目は、

先に、被爆死した同級生への負い目を語る「祭りの場」の一節を挙げたが、〈原爆文学〉では、同級生以上に長く生活をともにしてきた家族の死についての負い目がしばしば語られている。例えれば、後で言及する井上ひさし「父と暮らせば⁽⁹⁾」は、戯曲・演劇・映画の形で〈原爆文学〉としてはかなり広範なオードイエンスを得たテクストだが、これもまた亡くなつた家族に対する負い目を抱えた人物の物語である。

だが、〈内面〉を読んで思いやるという営みが「天皇を中心とした「同心円」の内側に向かつてなされるものだとすれば、死者または生き残つた被爆者の「同心円」上の位置に応じて、負い目の感情には偏差が生じることにもなるのではないか。自分よりも天皇に近い者には負い目が濃くなり、遠い者には薄くなるというような具合に。

本稿の目的は、この予測に従つて、〈原爆文学〉を中心とした原爆の語りにおける負い目の偏差を見出すことにある。そのこと

たが、『原爆文学』に留められた家族への負い目の多くが、亡くなつた親（または兄姉）に向けられたものであるということは、これまで注目されてこなかつた。子が親より後まで生きるのが生物の一般法則であることからしても、子どもの被爆死こそ親にとつても社会にとつても痛恨の極みではないかと想像されるのだが、『原爆文学』においては必ずしもそうではなく、親を失つた子の負い目の感情の方が圧倒的に多くテーマ化されているのである。一方、子を失つた親についての語りの中では、悲しみ以外にも、親の立場を正当化する言説が見受けられるようだ。

は恐らく、〈原爆文学〉の多くが〈娘〉の物語であることのわけを、いくぶんなりと解き明かしてくれるだろう。さらには、被爆の悲惨を伝えることがあります難しくなってきた今なお、〈原爆文学〉が、〈娘〉の〈疎外〉という特徴において延命し、それを

も、親の立場を正当化する言説が見受けられるようだ。たとえば、被爆一年後に『女性公論』に掲載予定であつた美川きよ「あの日のこと⁽¹⁰⁾」。学徒動員中の我が子を失つた広島の主婦が、母（か姑）にそのことを伝える書簡体小説だが、息子を案じながらも決して自分では探しに行こうとしない「私」の言動が

はらみながらも〈記憶〉の分有を促す可能性を持つことを示して
くれるだろう。

気になる報告である。

市内は火の海だと云はれ出来ず、御近所のやはり学徒で奉仕に出てる親御さんたちが皆より合つてどうすることも出来ず只うろくしていますと（中略）

午後になつても夏雄は戻らないので、兎も角も女の足では行けませんので、お父さんが一人で行けるここまで探しに行きましたが、一面の火の海で火の落ちるのを待つよりせんかたなしと、仕方なしに無事を祈りながら帰宅致しました。

「私」はその後、息子の最期の様子を聞き、「五体がもぎとられるやうな気が」したと言うが、一方で我が子の犠牲が「戦争の終止符となり、平和日本人の支柱になつたのだと思ひ無理にあきらめやうとして」いるとも書いている。手紙の中には、六日の朝に「ひどく疲れ気味」だつた息子の出勤を強く引き留めなかつた後悔も、「女の足」を理由に息子を捜しに出す、死に目に間に合わなかつたことへの後悔も全く見られない。息子の死は、悼まれながらもすでに「私」の中で過去の物語として回収されつつあるかのようなのだ。

子の被爆死を都合よく意味づける例としては、上坂冬子のドキュメンタリー「奄美の原爆乙女」⁽¹¹⁾を挙げることもできるだろう。長崎で妊娠中に被爆した女性の出産体験は、このテクストでは以下のようにまとめられている。

年が明けてまもなく、月足らずで生まれた長女には肛門が

なかつた。睦子と名をつけて出生届をすませたが、力なく泣きつづけるのみで表情も変化に乏しく、八ヶ月たつたころ発育不全で死亡した。大便も小便も尿道から排泄されたと夫婦は語っている。その後四人の子供にめぐまれたが、いずれも健康に育ったのは最初の子供が体中の毒を吸い取つてくれたおかげだと夫婦はうなづき合うのであつた。

もちろん、子（胎児も含む）の被爆の責任は個別の親にあるわけではなく、先にも述べたように、本当に責任を負うべき主体は別にいる。また、被爆の極限状態の中では親が自分の心身を守ることに汲々とし、「内臓がぶらさがつた赤ん坊を、女が走りながら川へ捨てていく」⁽¹²⁾というようなこともあり得たことだろう。炎を恐れて子どもを捜しにいくことをためらう感情も、理解できないわけではない。

問題は、そうした親の語りの多くが、子の被爆死を自分の負い目とは関わらせない形で物語化しているということである。それは、あの「同心円」において子どもより内側に立つ親が、子の「内面」ではなく自分の「内面」を尊重し、つまり、子の痛みや無念を直視しないことによつて自分の負い目を軽く済ませたということを意味するのではないかと思うのである。

先にあげた「奄美の原爆乙女」に見られるように、親自身が語り手でない場合にも、この傾向は認められる。細田民樹「被爆者たち」⁽¹³⁾もそうである。あの日、左官の万助は現場で「染の下じきにな」るが、同じ現場でよりひどい火傷を負つた息子に助けられて生き延びる。恩人である息子は救護所で苦しんだ挙げ句に死

ぬが、戦後の生活の中での万助の悩みは、もっぱら、原爆病のために部落の荷厄介にならないかということに集中しているのだ。

崩れているのに、目だけは強く光っていた。声を掛ける香子を振り向きもしなかつた。

（「連作一二」）

もちろん、子の被爆死を語る親の言葉の中に、深い悼みと悔恨に満ちたものがないわけではない。しかし、そもそも親が子の被爆死を語る言説がそれほど多くはない上に、そのうちのかなりのものが負い目とは別の文脈で語られていることに注意してよい。ここには、家庭においてより大きな権力を持ち、大人として言語を所有した親の立場が作用していると言えるだろう。原爆の語りにおいて、負い目の偏差は親子の間にまず見いだせるのである。

2 息子の命と娘の命

もちろん先にも述べたように、子の被爆死を深く悼み、悔恨を以て反芻する親の姿も、〈原爆文学〉の中には書き留められている。例えば「祭りの場」で、長崎医科大学に息子を捜しに行つた「私」の叔父は、灰の中に遺品を見つけ「耐えていた涙が一気に溢れて、死んだが、死んだかと両手で灰を撫で」る。

後藤みな子「樹滴⁽¹⁴⁾」の「母」もまた、「浦上の兵器工場に学徒動員に行つていた中学生の兄を探して歩」き、その死を見届けた後、精神を病んでしまう。

「兄」の死とともに時間を止めたかのような「母」の姿は、復員後、爆心地の焼けた裸木に光る樹滴に再生の意欲をかきたてられた「父」とは対照的で、子への愛の深さを感じさせるものである。しかし、「母」の心から置き去りにされながらその「母」と一体化して「獸のような目」になり、「母を背後に庇つて、通せんぼをして立つていた」娘の香子の存在を考えるととき、「母」の愛にも偏差があるのでないかという疑いが浮かび上がる。少なくとも、「母」を守ろうとする幼い香子の気負いとは裏腹に、香子の存在は「母」の意識をこの世につなぎ止めるほどの力を持つていなかつた。詮ない仮定だが、もし被爆死したのが香子で生き残つたのが「兄」であつた場合、「母」は精神を病むほどの痛手を負わなかつたかもしれないのではないか。

このような推測の背景には、被爆した子どもが少年であつた場合と少女であつた場合とで、親の取つた態度に違いがあることを示す記録があるからだ。広島テレビ放送編『いしぶみ—広島二中一年生全滅の記録—⁽¹⁵⁾』と大野充子『ヒロシマ、遺された九冊の日記帳⁽¹⁶⁾』は、それぞれ、本川土手と土橋付近で建物疎開作業中に被爆して全滅した中学生・女学生（後者は広島第一高等女学校一年生）についての日記や遺族の回想からなる書物である。広島二中、広島第一県女の一年生はいずれも三二一名で、そのうちこれらの書物には、二中の二〇二人、県女の三七人の名が記されている。

五日目に帰ってきたときの母は深手を負つた獣のような姿に変わり果てていた。帰ってきた母は涎を垂らして、離れの柱に凭れて庭の一点を見詰めていた。身体も着物もだらしなく

見過ごせないのは、名前とともに書き留められた彼らの被爆後の消息である。父、母などの年長の家族が作業現場まで探しに来た割合は中学生の方が多く、即死を免れた女学生の多くは軍用トラックに乗せてもらうなどして、自力で自宅近くまでたどり着いている。仮に、八月十日までに家族が市内に探しに来たことが明らかなもののページを割り出してみたところ、二中の場合は二〇二人中八五人で四二%、県女の場合は三七人中一三人で三五パーセントとなつた。

数字に表れた以外にも、二中と県女の保護者の対応には、幾つかの差異が見いだせる。二中の場合、父親が早急に捜索に出たケースが目立つが、県女では父親が動いたケースは五件にとどまる上、隣家に同級生が帰ってきてから家族が出かけるなど、対応そのものが早くない。また、異様な負傷者の群れに恐れをなして、娘をよく探さずに帰宅した母もいる⁽¹⁷⁾。

もちろんこうした分析は、もともとの母数が大きく異なる上に、調査の時期や規模にも差⁽¹⁸⁾があり、統計学的な有効性が高いとは言えないかもしれない。しかし、目撃された場所と名前だけの記述も多く含む前者に比べ、後者のほとんどは遺族からの話に基づいて書かれており、そのように死を悼まれた女学生であるにも関わらず、彼女らの多くが原爆投下の日には父母らによつて早急の捜索をされなかつたことに、私はやはり偏差を感じるのである。

「爆心地から三キロの己斐の町」で「飛ばされてしりもちつい」た母が、「隣のおばさんに蒲団しいてもらつて、寝」たまま姉娘に妹弟の捜索に行かせたとする『ヒロシマ、遺された九冊の日記帳』の記述なども、親にとつて子どもの性別による命の偏差があ

つたことを裏付けるものだらう。

管見によれば、原爆の語りにおけるこうした偏差については、加納実紀代の仕事⁽¹⁹⁾をのぞいてはこれまでほとんど問われずにきたようである。しかし、原爆の語りと読み手の意識に、親子の権力差に加えてジェンダー格差が深い影響を及ぼしている可能性は、もっと考えてもよいはずだ。

ふたたび『原爆文学』をふりかえると、子どもの性別による命の偏差を感じさせる言説は「樹滴」以外にも見いだすことができる。

岩崎清一郎「過ぐる夏に」⁽²⁰⁾はその好例だらう。

二つのエピソードからなるこの小説の「(その一)」は、一六年前の原爆で息子を失つた夫婦の物語で、後年娘夫婦に広島の家を明け渡して上京した彼らが、故郷で余生を過ごしたくなつて同居を申し出たところから小説は始まる。

娘一家との同居を願う老夫婦の気持ちの背景には、息子の死がある。彼らは、あの日建物疎開に出るのをしぶつていた息子の洋一を無理に出かけさせたことで、心の中でお互いをまだ責めている。その責めの思いを和らげるために、彼らは「哲夫(=娘婿、篠崎注)」を洋一になぞらえて、その息子のそばで老いの日をすごしたい」、孫の「透に幼い洋一をもう一度しのぼう」と願うのが、娘夫婦は歓迎せず、孫も祖父母になつかない。

あてがはずれた妻は、学童疎開で命拾いした上に幸福な核家族を持つ娘をねたむように、「美那子が一番トクをしていますねえ」と不満を言う。それをたしなめる夫も、子どもたちの幼時の記憶は全て息子のもので、記憶の中から娘の姿が消えていることに気

づく、というものである。

この老夫婦の愛情も死んだ息子にのみ集中しており、娘に対しても、夫や子どもを兄の代役として差し出して自分たちの欠落感を和らげるよう要求してはばかりない。老夫婦にとつて、こうした偏差は当然のものとなつており、娘に過酷な要求をする自分たちの不条理に、彼らはなかなか気づかないものである。

「(その一)」の方は、被爆した娘の物語である。「(その二)」の息子とは対照的に、「(その二)」の娘は、その日、命が助かりながらも母に見捨てられる経験を心に刻んでしまう。

「…あたしの母があたしをみつけたけど、泣きながら逃げ出してしまつたわ。あたしはこうして生きてゐるのにね、母はひどい怪我をして、二三日あとに死んじやつたの。あたしが死んでいて母がいま生きていたら、あたしを見殺しにしたことでくやんでいるにちがいない。あのときなぜ助けやらなかつたのかといつて」

3 内面化される「同心円」——「父と暮らせば」——

日本社会に深く根付いたモラルの「同心円」——しかし、そこにおけるポジション、つまり「天皇への距離」を決める基準はひとつではないだろう。性別、学歴、職業、経済力、健康状態、家庭内役割といった多くの要因が絡みあう中で、人々はなんらかのツールによつて内側のポジションへ自らが移行することを望み、かつ自分よりも内側の存在の〈内面〉を重点的に思いやり、許し、一体化し、服従するという営みを重ねてきたはずだ。その習慣の中では、「いすれは他家の人の⁽²²⁾」になる女の子より、母親を「靖国の母」に昇格させる可能性⁽²³⁾を持つ男の子が尊重されるのは必然で、それが、被爆した子どもの性別による親の対応の差につながつたのだろう。

この事態は、朝鮮人被爆者が受けた言語を絶するしうちを想像させる。当時、「同心円」の最も外側に置かれていた朝鮮人被爆者は、治療も施されず、遺体すら鴉に襲われるにまかせて放置されたりといった。彼らはそこで、〈内面〉を読まれる必要のない、つままりは人間ではないものとして「疎外」されていたのだと言つてしまい。しかも、日本の戦後社会は、まるでそれを当然のこと、つまり書き留める必要のないことと見なしたかのように、彼らに与えたしうちを、あるいは彼らの存在自体を表象することを拒んでいた。「同心円」が戦後も生き延びたことは、このようななところにも現れてゐると言つてよいだろう。〈原爆文学〉において、生き残つた〈娘〉の負い目を語ることがひとつ定型となつてゐる円」はやはり強力な「フレーム」として機能してゐるのだ。

事態も、これと同様、「同心円」の存続を示す証拠に数えられるよう思う。

たしかに無念の死を強いられた朝鮮人被爆者と、親の代から日本国籍を持つ内地の少女とを同列に論じることは乱暴に見えるかもしれない。しかし、社会ではもとより家庭でも二次的な価値しか認められず、小さな「同心円」の中で最も外側に居続けた〈娘〉を〈疎外〉の対象として見いだすことは、差別を本質主義から切り離す助けになる上に、「同心円」の暴力性を明らかにするために極めて有効なのはあるまいか。特に、〈疎外〉された者が自らその構造を内面化し、自己疎外とも言うべき状況に追い込まれていく様子は、〈娘〉の〈原爆文学〉に極めて顕著だからである。

井上ひさし「父と暮らせば」を見てみよう。

生き残った被爆者である福吉美津江は、「うちよりもつとえつとしあわせになつてええ人たち」に対する負い目の感情を引きずり、「うちがしあわせになつては、そがあな人たちに申し訳がたたん」と思い続ける人物である。「そがあな人たち」の具体像は、当初は「昭子さん」に焦点を結び、次第に「おとつたん」へとシフトしていくのだが、その一人が負い目の対象として選ばれたわけも、「同心円」の介在を勘案すると理解しやすい。

原爆投下の前、福吉美津江と福村昭子は「県立一女から女専までずうつといつしょ」の親友で、昭子の母静枝も美津江に「実のと慕う程に、彼らは仲のよい二家族、いわば疑似家族のような人間関係を結んでいたことが想像される。

ところが原爆投下の当日、福吉竹造と福村昭子は命を失い、静枝は大火傷を負つた。後日彼女を見舞つた時に、美津江は静枝から思いがけない言葉を聞くのである。

美津江 「なひてあんたが生きとるん」

竹造 ……！

美津江 「うちの子じやのうて、あんたが生きとるんはなんですか」

（篠崎注・静枝の言葉を美津江が再現した場面）

「うちの子」を失つた悲しみのあまり静枝が「ちい一つと気が迷うて」言つたことだと思えれば、この言葉は美津江の心に長くとどまらなかつたかもしれない。しかし、静枝を「実のおかやん」のように慕う美津江は、自分が「うちの子」ではないものとして排除され、昭子に比べて「生きとる」価値のないものと見なされた理由を探さずにいられなかつた可能性がある。昭子が「うちより美しゅうて、うちより勉強がてきて、うちより人望があつ」ために、自分よりも幸せになるべきだつたとする結論は、この問題に対する美津江の答えたと云つてよい。美津江は、自分と昭子の命の重さを、あの「同心円」上のポジションによつて測定⁽²⁴⁾したわけである。「同心円」の体系は、美津江自身に既に内面化されていたのだ。

被爆死した少女に「同心円」がまとわりつき、生き残つた人々が彼女の位置を測定する営みは、ほかの〈原爆文学〉にも見いだせる。例えば、林京子「野に」⁽²⁵⁾がそうだ。三十三回忌の席で、

「私」は亡くなつた一人の旧友を、このように回想する。

学業の優劣は、何処にでもついてまわるものである。杉野の職場の前を通る度に、私は忘れていた成績表を思いだした。しかし選ばれたことが仇になつた。杉野は、赤煉瓦の下敷になつて死んだ。逃げ出せなかつたのだ、という。杉野の死は、優等生の死にふさわしく、即死説のほかにも、さまざまな噂がたつた。一方、山本の死は、それ以上の噂には発展しなかつた。そのうち、いつか忘れられていつた。

「学年でも一、一番を争う、頭のいい」優等生であり、工場の花形「教務課」に配属された杉野のポジションは、「平凡な」山本や、「紙屑再生処理上のバラック」に配属された「私」のものは「雲泥の差」であつた。それが意識にあるのか、供養に現れた杉野の母もまた、「なまじな悔みはうけつけない、険しさ」で「私」を遇する。

親が子の被爆死に対し、自分が引き受けなかつた負い目、引き受けきれなかつた負い目を他の弱者に投げるケースは、「過ぐる夏に」「父と暮らせば」でも見てきた通りである。そして負い目を投げかけられた〈娘〉の多くは、その暴力に抵抗せず、「同心円」を心に描いて自分を納得させつつ、それを引き受けてしまうのである。

そのように考えるとき、〈原爆文学〉の主人公として〈娘〉が設定されがちな理由が見えてくる。〈疎外〉を内面化した「娘」とは、それ以上負い目を他者に転嫁することができない行き止ま

りの装置なのである。だからこそ、人々は安心して、「あんたが生きとるんはなんですか」という言葉を〈娘〉たちに投げることができるのだ。そしてその言葉を心の中に反芻しつづける彼女たちのことを、かわいそうだがそれは必然だと受けとめる社会の中で、「娘」たちの〈原爆文学〉は書き継がれ、読み継がれてきた。「父と暮らせば」ほか、先に挙げた後藤みな子「樹滴」や、こうの史代「夕凧の街」⁽²⁶⁾、松谷みよこ「二人のイーダ」⁽²⁷⁾、今西祐行「ヒロシマの歌」⁽²⁸⁾「あるハンノキの話」⁽²⁹⁾早坂暁原作「夢千代日記」⁽³⁰⁾など、「同心円」のより内側に位置する家族を失った〈娘〉の物語は、〈原爆文学〉の中でも比較的広範な読者を得る傾向があるようだが、それは彼女たちの〈内面〉を抑圧することについての社会の同意の結果なのかもしれない。

4 〈娘〉の負い目と結婚

「父と暮らせば」の美津江は、この後、「同心円」のより内側に位置する父（親▽子・男▽女）という存在から生を肯定され、いつたん〈疎外〉された個を〈回復〉したかに見える。しかしこの〈回復〉は、美津江が死者に「生かされとる」ことを自覚するという条件においてのみなされるものだ。

竹造

人間のかなしいかつたこと、たのしいかつたこと、

それを伝えるんがおまいの仕事じやろうが。そいがおまいにわからんようなら、もうおまいのようなあほたれのばかたれにはたよらん。ほかのだれかを代わりに出して

くれいや。

美津江 ほかのだれかを？

竹造 わしの孫じやが、ひ孫じやが。

(4)

の人たちは、矢須子が原爆病患者だと云つてゐる。患者であることを重松夫婦が秘し隠してゐると云つてゐる。だから縁遠い。近所への縁談の聞き合わせに来る人も、この噂を聞いては一も二もなく逃げ腰になつて話を切り上げてしまう。

美津江に希望を持たせる結果になつたとは言え、竹造による〈回復〉は、美津江の生の無条件の肯定ではない。また、「原爆病はねんねんにも引き継がれることがある」のを知つてゐるはずの竹造（の幻）が、子々孫々に原爆を伝えよといふ命題を美津江に下す点にも疑問が残る。美津江と木下との結婚は、これから木下の両親の許しを得なければ実現しないだろうし、美津江が健康な子どもを授かるという保証もない。被爆した〈娘〉の負い目に、そうした結婚をめぐるハードルそのものも関わつてくるだろうことを考えれば、竹造による〈回復〉は、あまりに無神経である。

結婚のハードルをめぐる被爆した〈娘〉の物語と言えば、井伏

鱈二「黒い雨⁽³¹⁾」において語ることはできないだろう。ただしこの物語を牽引するのは、姪の結婚を巡つて、姪の被爆を導いた叔父が抱く負い目の感情であつた。

姪の縁遠さについて負い目を感じる叔父の姿は、この小論の主旨とは異なり、「同心円」の内側から外側に向かつて忖度のベクトルが確かに働いていることを示すかに思われる。しかしそく気をつけてみると、この叔父の負い目も、必ずしも姪の矢須子自身に対してものではなく、彼よりも年長で権威のある存在に対しても向けられたものであることがわかる。

爆心地近くを逃げた時の日記には、このようにある。

僕は矢須子を娘ぶんとして預かつてゐる以上、この子に万のことがあつては、シゲ子の両親に對して顔向けが出来ないのだ。（中略）せめて矢須子だけでも逃げのびさせてやりたい気持があつた。徵用を逃れさせるため、矢須子を広島へ来させたのは僕の浅知恵からしたことだ。矢須子のことは、妻とは同一視は出来ないのだ。

(6)

この数年来、小畠村の閑間重松は姪の矢須子のことでの心に負担を感じはじめてきた。数年来でなくて、今後とも云い知れぬ負担を感じなければならないような気持であつた。二重にも三重にも負目を引受けているようなものである。理由は、矢須子の縁が遠いという簡単なような事情だが、戦争末期、矢須子は女子徵用で広島市の第二中学校奉仕隊の炊事部に勤務していきたいう噂を立てられて、広島から四十何里東方の小畠村

重松が、八月一〇日に小畠村から彼らを探しに来た「義兄」「二人」について、「一人はシゲ子の実兄で渡辺正男と云ひ、一人は矢須子の実父で高丸好男と云う」と書いてゐることから、矢須子は重松の妻シゲ子の姉夫婦の娘にあたるのではないかと想像され

る。「シゲ子の両親」「義兄」たちと重松夫妻との間に、過去にどうもないきさつがあつたのか、小説はほとんど触れないが、矢須子の徵用逃れ工作にしろ、原爆当日の心づかいにしろ、重松が、矢須子自身というよりも、矢須子の向こうに義父母を初めとする妻方の親戚を見ていることだけは察せられる。すでに自分の所有物となつた妻についてはともかく、目上の存在からの預かり者である矢須子の身だけは守らねばとする重松は、やはり、「同心円」の内側に向かつて、忖度のエネルギーを発動させる人物だなのだと言えよう。

重松夫妻が、もうひとつ気にかけているのは「世間」である。先の引用にもあるように、村人たちは矢須子が原爆病であるのを「重松夫妻が秘し隠している」と思い、非難の目をむけている。矢須子が本当に発病したときも、「矢須子が重松夫妻に知れないように家庭療法の本を見て独り治療していたこと」が「世間に知れたら、重松夫妻は原爆病の養女が重態になつたのに、まだ放つたらかしにして置いた曲解されるだろう」と梶田医師に告げられたシゲ子は、興奮してそれを重松に告げる。

「あたしや、可哀そうを通り越して、口惜しくて口惜しくて。あの人、腫物なんかにこだわつて、何ということかしら。でも、まさか思い当たることなんかなかろうに、どうして早く云つてくれなんだのかしら」

(16)

原爆病の手当が遅れたのは、確かに矢須子が「重松夫妻に遠慮しすぎた」ためだらうが、それは、重松に焦点化した語り手が言

うように「婚約がまとまりかけて、嬉しさ恥ずかしさで血の道が起つたようになつていて」ことによるものではあるまい。むしろ、矢須子の結婚に自らの名譽回復をかける重松の思いをくみ取つた矢須子が、性病の疑い⁽³²⁾や原爆病の兆候を、重松夫妻にも「世間」にも気取られまいとした結果に違いない。

仲人が、八月六日の矢須子の足取りを知りたいと言つてきたときの重松の反応はこのようなものだつた。

重松は、重ねてまた自分が負目を感じることになつたと氣がついた。家内はその手紙を読むと黙つて矢須子に渡し、畳に目を落して立つて納戸に引込んでしまつた。矢須子も納戸に入つて行つた。暫くして重松が覗いて見ると、家内が矢須子の方に顔を凭せかけて二人しきしく泣いていた。

「よろしい、今度という今度は、わしが悪かつた。だが、人の噂だけで業病扱いするとは何ごとか。いや、我々は再起をはかるんだ、突破口を見つけるんだ」

(1)

矢須子は、自分の結婚にかける叔父の激しい気負いを内面化し、むしろ叔父の負い目を引き受け、背水の陣の思いで縁談に臨んだのではないか。矢須子が戦後も、同じ小畠村にあるらしい高丸家に帰らず、重松の姪として嫁入りを果たそうとするわけも、そのへんにあるのかもしれない。そうだとすれば、ついに結婚の資格を失つて、叔父の役には立てないことになつた矢須子は、叔父叔母に対しても、両親に対しても、祖父母に対しても負い目を感じ

ることになり、それは、叔父の重松とは比較にならないほど深いものになつたことだろう。

一方重松の方は、仲人から「矢須子の日記」を要求されたとき、それに加えて、自分の「被爆日記」の清書をやりとげる作業にのめりこんでいく。「矢須子の日記の付録篇」にするためだと言い訳はするものの、これは小学校の図書館の資料室に寄附すること

がきまつていて、矢須子の問題とは関係のない「わしのヒストリー」でもある。そして、重松はこの日記の清書（と後日記の加筆）に夢中になつた結果、肝心の「矢須子の举措について迂闊」になり、発病を見逃すという失態を犯してしまう。「矢須子さんのお父さん」が「病人の医療費いつさいは、あの子の分前ぶんのうちから出したい」と申し出たとき、重松は「むつとしたような顔」をしたというが、「同心円」のより外側にいる矢須子の〈内面〉をあまり見ようとしなかつたという点では、重松と高丸に大きな隔たりはない。矢須子の〈内面〉に重松夫婦が関心を向け始めるのは発病してからのことである。

5 再生産される負い目の〈娘〉

原爆で生き残つたことに負い目を感じ、死者に「生かされたる」ことを感謝しながら、結婚して子どもを生むことに自分の役目があると思い込まされ、にもかかわらず、原爆のためにそれが果たせますます負い目を抱え込む——〈原爆文学〉に書き留められた〈娘〉たちは、この負い目の連鎖のどこかに関わっているようである。また、このような定型の物語が、反発よりも共感を得て

きたらしいことも、既に指摘した通りである。〈娘〉というものが、もしも今日まで、それ以上負い目を他者に転嫁することのできない行き止まりの装置としてあり続けているとすれば、広島、長崎の原爆投下から六十八年以上たち、その具体的な記憶が薄れつつある今も、負い目を持つ〈娘〉は再生産されている可能性がある。

再び、後藤みな子「樹滴」を見よう。父の看病に通いながら、中学生の娘に作り置きのカレーを煮詰めるよう電話で伝える香子は、「娘に夕食の支度をしてやれない申し訳なさよりも、母親の存在はいいものだなど、娘に羨ましささえ感じ」ている。心を病んだ母を伯母に任せていることや、闘病中の父の思いをくみ取れなかつたことには激しい後悔と申し訳なさを感じる香子だが、娘に祖母の存在を隠してきたことへの罪の意識はない。父母を守る「獣のような目」は、香子から娘に對してすら向けられているかのようだ。

先にも述べたように、かつて〈娘〉は息子と違い、戦死によつて母に最高の名譽を与えることもできない、親にとつては取り替えのききやすい代わりに価値の低い持ち駒であつたのだろう。そしてそのような忌まわしい「子」のとらえ方は、人権意識の高まりや、女性の社会進出とともに過去のものとなり、女の子の〈内面〉も顧みられるようになつたはずだった。が、「樹滴」の香子に見られるように、自らが〈疎外〉された経験を持つ〈娘〉が、今度は〈母〉として〈娘〉の〈内面〉から目をそらすという負の連鎖も、今日またあり得るようなのである。

近年しばしば取り沙汰される〈母〉と〈娘〉の関係の歪みに注

目する信田さよ子⁽³³⁾と上野千鶴子も、〈母〉による〈娘〉の〈疎外〉に注目する。上野によれば、「学力競争において男女平等となり」「生涯に一度だけ子どもを産むとしたら」息子より娘を選ぶ人が多くなった一九八〇年代以降も、〈娘〉には、「母親の欲望の代理充足」が求められる半面、その目的のために邁進する〈娘〉の痛みを引き受ける者はいないのだという。

上野 ただし、私は一九八〇年代半ばに娘選好に転換したことが、娘のステータスの上昇だろうかとずっと考えてきたのですが、結論から言うと、そうではないと思います。ひとつには超高齢化社会への不安感が娘選好を強めたこと、もうひとつは教育投資を含む子育てのコストの高さと困難が娘選好を導いたのだろうと。つまり、息子だつたら子育てに失敗が許されないけれど、娘は耐久消費財として子育てが楽しめる。結局、それは子育ての無責任化ということなんですが。

(中略)

信田 先ほど上野さんがいみじくも耐久消費財とおっしゃいましたが、たしかに母親たちは非常に狡猾に、自分の人生を娘に賭けるように見せて、実は賭けずにして適當なところで手をひける距離感を保つていると感じられることがあるんです。

(「スライム母と墓守娘—道なき道ゆく女たち」)

都合のよいところでだけ〈娘〉のもたらした名譽をかすめとり、

労働力を利用しながら、不遇の時には決して運命をともにしようがない〈母〉のあり方は、原爆の日に、傷ついた娘が自力で帰つてくるのを火の届かない自宅で待つていた母の姿と重なり合う。そのようなご都合主義の親の欲望の転嫁を跳ね返すことは——それは当然の生きる権利であろうけれど——代々「同心円」の最も外側に置かれて〈疎外〉を内面化してきた〈娘〉にとつて非常に困難な冒険である。

もちろん、日本近代文学史の中で、「他者の欲望に過剰適応して生き延び」⁽³⁴⁾、「自己」を見失つてしまつた人物を語るものは珍しくない。太宰治「人間失格」などはその典型である。しかし、大庭葉蔵が、〈内面〉を読む必要のない気楽な相手を、「竹一」や「淫売婦」らに見いだしたのと異なり、〈娘〉にはそうした対象がない。〈疎外〉される苦悩と理由をめぐつて手記をしたため、他者に読ませるという自由もない。〈娘〉は行き止まりの装置だからである。

広島にも長崎にも縁のないはずの現代の〈娘〉が唐突に原爆に引き寄せられる物語は、こうした〈疎外〉という共通点の上に成立するのだろう。田口ランディ「被爆のマリア」⁽³⁶⁾は、両親からの虐待を受け続け、他人の欲望に沿つてしか生きられなくなつた若い女の物語である。バイト先の同僚から「アダルト・チルドレンでしよう?」と指摘された「あたし」は、原爆にひきつけられる不思議な気持ちをこのように吐露する。

「巨大なキノコ雲とか、吹き飛ばされた瓦礫の街や、被爆して焼けただれた人たち、そういう写真を見たくてたまら

なかつた。吸い寄せられてしまうんです。いつも一人で眺めていました。そのとき偶然、被爆のマリア様の写真を見つけて、ものすごくショックを受けました。どう言うのかな、ああ、これだつて思つた

を受け取り、自らのものとし、その不条理全てに対する怒りを持ち続けていたいと願つてゐる。

「被爆のマリア」を「美しい」と思う「あたし」は、両親から暴力を受け、金を奪われ、「友達」からも「カモ」にされる自分自身を「被爆のマリア」になぞらえることで、やつと肯定することができてゐるのだ。

広島、長崎での被爆を言葉で伝えるのは困難だと、体験しなければわからぬことだと、多くの被爆者は語る。そうなのだろう。その上、伝わらないもどかしさをおして語り、書く人々も、今は決して多くはない。

しかし、見てきたように、原爆の語りの中には、モラルの「同心円」にもどづく「疎外」が大きな影を落としている。そしてその「同心円」が今日もなお隠微な形で社会に潜み、〈娘〉に象徴されるいわれのない負い目を抱えた人々が存在する以上、原爆被爆や戦争などの経験がなくても、我々は、その不条理に思いをはせるることはできるだろう。そして、このような〈疎外〉と負い目をてこにすることと、我々はいくぶんかの〈記憶〉の分有をめざし続けることができるのではないか。

〈疎外〉ももちろん堪え難い不条理であり、いつかは昔話になることが望ましい。が、いまだに残る「同心円」の残骸の中で生きる人間のひとりとして、私は今、この一点に依つて原爆の語り

注

1 丸山真男「超国家主義の論理と真理」（一九四六年）、（『現代政治の思想と行動』（未来社、一〇〇八・一一））

2 拙論「温存される〈浦上燔祭説〉——原爆死の意味づけと戦後天皇制をめぐつて——」（『社会文学』一〇一三・七）

3 柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社、一九八〇・八）

4 丸山真男。注2に同じ。

5 このいきさつについては、拙稿「朕の居場所」（関礼子・原仁司編『表象の現代——文学・思想・映像——』翰林書房、一〇〇八・一〇）および「温存された〈浦上燔祭説〉」（注2に同じ）に述べた。

6 ロバート・J・リフトン『ヒロシマを生きぬく（上）——精神的考察』（岩波書店、一〇〇九・七）。原著は“Death in Lives: Survivors of Hiroshima” 1968の邦訳『死の内の生命——ヒロシマの生存者』（朝日新聞社、一九七一・二）。

7 佐多稻子「樹影」（『群像』一九七〇・八・一九七一・四）、『樹影』（講談社、一九七二・九）

8 林京子「祭りの場」（『群像』一九七五・六）、『祭りの場』（講談社、一九七五・八）

9 井上ひさし「父と暮らせば」（『新潮』一九九四・一〇）、『父と暮らせば』（新潮社、一九九八・五）、初演一九九四・九・三・一八（紀伊国屋ホール、演出／鵜山仁、出演／すまけい・梅沢昌代）、映画『父と暮らせば』（一〇〇四、監督／黒木和雄、出演／宮沢りえ・

- 10 長岡弘芳「解題」(『日本の原爆文学⑩』ほるぷ出版、一九八三・八)によれば、『女性公論』第二号(一九四六年七月号)にのせられるはずだったものが、印刷過程で占領軍により発禁処分とされ、一九八二年夏、堀場清子の手で発掘された」とのこと。初出は『朝日ジャーナル』(一九八一・八・六)。
- 11 上坂冬子『女たちが経験したこと——昭和女性史三部作——』(中央公論新社、二〇〇〇・一二)所収。
- 12 後藤みな子「炭塵のふる町」(『文藝』一九七二・八)
- 13 細田民樹「被爆者たち」(『社会主義文学』一九五八・一一)
- 14 後藤みな子『樹滴』(深夜叢書社、二〇一二・七)
- 15 広島テレビ放送編『いしぶみ—広島二中一年生全滅の記録—』(ポプラ社、一九七〇・六)。『改訂新版 いしぶみ—広島二中一年生全滅の記録—』(ポプラ社、二〇〇五・七)を経て、二〇〇九年七月よりポプラ社ポケット文庫に所収。
- 16 大野充子『ヒロシマ、遺された九冊の日記帳』(ポプラ社、二〇〇五・七)
- 17 学校まで自力で戻って絶命した生徒について、「松本郁子は待つていたのに、お母さんは教室のなかまでこないで帰つたのです。植え込みの末の下の国宗孝子を見て、きっとこわくなつたのです。」という記述がある。
- 18 「いしぶみ」は、薄田純一郎によるあとがきによると、広島テレビ放送が制作し、一九六九年に芸術祭テレビドラマ部門で優秀賞を受賞した「碑」の草稿をもとに書かれたものだという。一方『ヒロシマ、遺された九冊の日記帳』は、著者が一九七〇年から遺族を訪ねる旅を重ねて書かれたもので、刊行期こそ異なるが、調査の時期はそれほど隔たつてないわけではない。
- 19 加納実紀代『ひろしま女性平和学試論—核とフェミニズム—』(家族社、二〇〇二・九)、「被爆体験とジェンダー」(上野千鶴子編著『フェミニズムから見たヒロシマ—戦争犯罪と戦争という犯罪のあいだ』(家族社、二〇〇一・九))、加納実紀代『ヒロシマとフクシマのあいだ—ジェンダーの視点から—』(インパクト出版二〇一三・三)などがある。
- 20 岩崎清一郎「過ぎる夏に」(『安芸文学』一九六二・一〇)
- 21 中山士郎「死の影」(『南北』一九六七・一〇)
- 22 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』(朝日新聞社、二〇〇〇・一一)
- 23 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社、一九九八・三)
- 24 美津江は「駆けっこならとにかく、勉強では一度も昭子さんを抜いたことがのうて、うちはいつも二番」と語る。美津江の負い目が亡くなつたほかの同級生に比して特に昭子に対し強いたことには、親しさ以上に、この成績順位が関わつていて可能性があるだろう。
- 25 林京子「野に」(『群像』一九九八・二)、『ギヤマン・ビードロ』(講談社、一九九八・五)
- 26 こうの史代「夕凧の街」(『WEEKLY 漫画アクション』二〇〇三・九・三〇)、『夕凧の街 桜の国』(双葉社、二〇〇四・一〇)
- 27 松谷みよ子『ふたりのイーダ』(講談社、一九六九・五)
- 28 原題「原爆雲のイニシアル」(朝日新聞ジュニア版)一九五八・八・七)、「ヒロシマの歌」として国分一太郎編『日本クオレ2・愛

と真心の物語』（小峰書店、一九六〇・一二）所収、現在も東京

書籍『新しい国語6年生（下）』に収められている。

ということではないか。

29 今西祐行「あるハンノキの話」（『児童文芸』一九六〇・三）、『あ

るハンノキの話』（実業之日本社、一九六六・一二）

30 早坂暁原作・脚本「夢千代日記」（NHKドラマ人間模様一九八一・

二・一五・三・一五、全五回。続いて「続・夢千代日記」が一九八二年に、「新・夢千代日記」が一九八四年に放映された。）

31 原題「姪の結婚」、途中から「黒い雨」に解題（『新潮』一九六五・

一・一九六六・九）、『黒い雨』（新潮社、一九六六・一一）

32 お尻の「腫物」が出来たとき、伝染を恐れて矢須子が入浴を控えたということから考えて、矢須子が性病を連想したことが伺える。

シゲ子が言うように「思い当たること」があるわけではなくても、もしも叔父叔母に疑われたり、通院によつて噂が「広がつたりすれば、縁談の障りになることは間違いない。「流言飛語」によつて縁談がつぶれる経験を経てきた矢須子だからこそ、過剰な心配をした

33 信田さよ子『それでも家族は続く－カウンセリングの現場で考え

る－』（NTT出版、二〇一二・六）。上野との対談「スライム母と

墓守娘」を所収。対談の初出は『ユリイカ』（二〇〇八・一二）

34 老松克博「解説 日本人と自己愛の問題」（K・アスパー著、老松

訳『自己愛障害の臨床－見捨てられと自己疎外－』、創元社、二〇〇一・一）

35 太宰治「人間失格」（『展望』一九四八・六・八）

36 田口ランディ「被爆のマリア」（『文學界』二〇〇五・一二）、『被爆のマリア』（文藝春秋社、二〇〇六・五）

付記 本稿は、第40回原爆文学研究会（二〇一二年一二月二三日、於

九州大学西新プラザ）にて、「〈内面の発見〉と罪悪感－原爆の語りと〈娘〉－」の題で口頭発表した内容に補訂を加えたものである。席上、ご教示下さいました皆様に、篤く御礼申し上げます。